

## 岐阜協立大学としての新たなスタート



学長 竹内 治彦

本年4月、岐阜経済大学は岐阜協立大学として、新たなスタートを切ることになりました。岐阜経済大学は、1967年（昭和42年）に、自治体、経済界、教育界の熱意により社会科学系の公設民営大学として大垣の地に始まりました。

その設立趣意書には、とても格調高い文体で、本学の建学の精神である創造発見、知才涵養、資質発揚、地域貢献といったことが書かれています。知才という言葉には、「社会指導の負荷に耐えうる」という条件がついており、社会の責任あるリーダーを養成したいという思いが感じられます。資質発揚も、「資質の真価を発揚する」と書かれており、自分の100%を発揮できるようにとの思いが感じられます。高度成長期という日本が輝かしく成長していく時代に、この地方に新しい大学を造るという意気込みが感じられます。

それから50年がたち、50周年の2017年、岐阜経済大学は大垣女子短期大学と法人合併をし、同短大に設置されていた3年制の看護学部を移設、4年制にすることとし、それに合わせて大学名称も岐阜協立大学と変更することになりました。50周年事業として行ってきたキャンパス整備も整い、名実ともに、新しい大学のスタートと言えるような2019年度の幕開けです。

このように名称は変更されますが、この大学が50年以上に渡り、ずっと継続して追求してきたことは、建学の精神とも相通じる、「地域に有為の人材を養成する」という教育目的です。有為の人材というのは、どのような人材を指すのでしょうか。辞書的に言えば、「有能な人材、役に立つ人材」ということになります。しかし、この辞書的な言い換えでは、わざわざこの言葉を用いた先人の想いは十分には伝わりません。「有為の」という言葉は、森鷗外の『舞姫』の中で使われているくらい古い言葉ですが、明治期に使われていた表現だけに、何か新しい時代に向かって開かれていく印象、何事かを成し遂げてやるといった意気込みが感じられる言葉ではないでしょうか。

以上、説明してきた本学の精神を語る言葉達には、行動・実践において、学生の皆さんが、その存在を、その力を表現してほしいという思いが共通して感じられます。そこでは、皆さんの積極性、主体的な態度が求められています。大学における教科の学習においても、課外の活動においても、皆さんの主体的な姿勢、学びがとても大切になってきます。自ら学ぶ主体となり、新しいことにチャレンジしていく姿勢、何かを成し遂げていく主体性を身に付けていくことこそが大学教育の目的と言えるでしょう。

この冊子には、履修の手引という形で、本学での学びの体系が示されているほか、本学を活用する様々な可能性と同時に、本学で過ごすうえでの様々なルールも書かれています。皆さんが、この冊子を十分に活用し、大学に主体的にかかわってくれることを期待します。